新刊書評・紹介

源氏物語の研究書を主とする平安文学研究書の書評・紹介

森　一郎

斎藤清衛「中世日本文学」（有朋堂）
玉上琢彌「源氏物語研究」（角川書店）
清水好子「源氏物語論」（塙書房）
今井源衛「紫式部」（吉川弘文館）
手塚昇「源氏物語の再検討」（風間書房）
高橋和夫「源氏物語の主題と構想」（桜楓社）

今回は昭和41年刊（1月―8月）の研究書のうち、右の六著書について書評・紹介させていただくが、この外にも名著と呼ぶべき平安文学研究の著書が数多く出版された。柿本奨氏の「蜻蛉日記全注釈」（角川書店）、石田穣二氏の「枕草子」（角川書店）の両注釈書はぜひ座右において読むべき必読の書としてすすめたい。精密周到な読みの深さに学ぶこと尽きないものがあるのである。いわゆる語義、言葉の解釈にとどまるのでなく、作品を具体的に促えるあらゆる方途を尽くしたものなのである。されば徹底した考証、鋭い心理解析が加えられ、言葉はその背景の厚みと深い掘り下げによって真の立像を結ぶ。石田氏の「枕草子」は文庫本のためペースに制約があり、補注に周到な考証がなされたほかは言葉の心理解析等には及んでいない。氏の鋭い言語感覚は文芸批評・語彙考証の論文につとに知られており、本書では現代語訳や脚注、補注にうかがえるが、語釈のペースがせますぎるのは残念である。しかし文庫本で親しみやすく、現代語訳は独立した読み物としても楽しい。柿本氏のは大著でペースも豊かであり到れり尽くせりであるが、わたくしたちはやはり用例実証主義のきびしい学的態度と着実な研究成果に最も多くを学ぶであろう。徹底した用例実証のきびしい学的態度は、「追記」の用例を附されたことに感きわまるものがある。学者というものの手本がここにある。

山脇毅博士の「枕草子本文整理札記」は貴重な出版である。関西大学国文学科の機関誌「国文学」に、昭和二十七年二月以来、十九

回にわたって連載されたもの。生前本学教授であられた先生の御業績に改めて学恩の深きを思うものである。巻頭に先生の自画像を拝することができる。先生の御遺徳を思い、先生の温かいお人柄を偲ぶものである。

宇津保物語研究会編（古典文庫刊）の「宇津保物語新攷」は「宇津保物語新論」についで公にされた研究会のすぐれた研究成果である。「新論」が成立論に関する論文を主としていたのに対し、このたびの「新攷」は文学批評を主とするところに特徴がある。「宇津保物語の様式」（笹淵友一）「宇津保物語の志向」（丸山キヨ子）「宇津保物語の表現と享受者」（小西甚一）「宇津保物語における表現の問題」（桑原博史）「宇津保物語の構造」（上坂信男）「『蔵開』と『国譲』の世界」（野口元大）「宇津保物語と遊仙窟」（原田芳起）「宇津保物語出典新考」（石川徹）「宇津保物語の成立事情とその増益」（三谷栄一）「嬉戯院の巻と菊の宴の巻におけるいわゆる重複部分について」（武田宗俊）「嬉戯院巻の問題」（中島尚）「宇津保物語登場人物綜覧」（片桐洋一）「うつほ物語の影響」（中野幸一）「物語歌の一側面」（中村忠行）「宇津保物語研究の展望」（神作光一）「宇津保物語研究文献目録」（神作光一）。ずらり並んだ宇津保研究の結晶は見事というほかない。

中でも片桐氏の「人物綜覧」は益すること多大というべきであろう。

角田文衛氏の「紫式部とその時代」（角川書店）は、学界に問題を提供した「紫式部の本名」をはじめ、紫式部の生涯にわたる考証が積み重ねられている。種々反論も出ているが、学界に新視角を与えた功績が認められている。

武者小路辰子氏の「源氏物語の女性像」（角川書店）は研究書ではなく創作的な文学資質の光った好著であるが、しかし著者の研究者としての眼がきめこまかにゆきわたっていて学問的な厚みを感じさせる。その魅惑的な文章が源氏物語の美しい世界を現代の読者につたえるのに大きな力となろう。

吉田幸一博士の「和泉式部全集　資料篇」（古典文庫）、藤岡忠美氏の「平安和歌史論」（桜楓社）、橋本不美男氏の「院政期の歌壇史研究」（武蔵野書院）、岸上慎二氏の「後撰和歌集の研究と資料」（新生社）、久曽神昇氏の「西本願寺本三十六人集精成」（風間書房）など和歌文学に関するすぐれた研究書も出た。池田亀鑑博士の「平安時代の文学と生活」（至文堂）は全円的な環境研究の書であり、まことに有益な有難い本である。又、四十年の年末の刊ではあるが大阪女子大学国文学研究室刊の「後撰和歌集総索引」など貴重な成果が示された。

かように、今回取りあげる六著書以外にも必読必見の名著が多く出版されたことをはじめに御紹介しておく。ここに記さなかったもの、特に「平安朝歌合大成」（萩谷朴氏）、「日本古典文学大系」、「古典文庫」等々の叢書刊行物の貴重さは申すまでもあるまい。ま

た、わたくしの見落した名著もあろう。かように大著の刊行が出揃う事実を前にして、国文学研究の新しい発展を促すものの声とひびきを大いに感じるものである。もちろん、事は、平安文学だけではないが、中古文学会がようやく設立されることになった機運にあわせかんがみ、平安文学研究の名著の豊かさを思うのである。

◇

さて、斎藤清衛先生の「中世日本文学」は本学の四年生あたりは所持して読んでいるようであるが、三年以下も、特に古代部会（古代後期）、中世部会あたりの方々はぜひ熟読をおすすめする。

本書はまさに名著である。先生の三十年前の御著作で、垣内松三門下第一のお弟子としての先生の面目が躍如としているのである。すなわち、当時、文学史研究に関する垣内理論は、従前の作品解説の羅列を排して、いわゆる考証を従として、作品内容に直接迫り、文学精神、文芸思潮の解明を提唱したものだった。垣内先生は、作品を広く深くよく説めと言われたとのことである。当時は注釈的研究の水準が低く本文批判もすすんでいなかったから、「よく説め」と言われてもなかなか苦しかったらしい。しかし斎藤先生は、とにかく作品にぶつかって説みに説まれたのである。斎藤先生の、あの独特のスケールの大きい学風は、この説みに説まれるところから生い育ったものなることをうかがい知るのである。

さて、文学史的研究は今日かなり進んできているが、なお、作品解説の羅列の匂いは脱しきれず、僅かに思潮的なものを加味した小手先のものに終わっているのが一般である。だから、先生の文学精神史、文芸思潮史の立場は、国文学界においては今なお独自にして新しいのである。ヨーロッパの文学史研究には文芸思潮史の研究が見られるのに、国文学界では、そうした文芸そのものを焦点とする研究が乏しいとは久しい間言われつづけてきたことである。文芸（美的形象の論）が焦点なのか学問（科学性）が焦点なのか、国文学界の久しい悩みなのであるが、先生は文芸を焦点とする研究と教育を常に主張していられることも知られるとおりである。

尤も先生が本書の「はじめのことば」で謙虚に語っていられるように国文学史の研究は進んでおり、「中古中世時代の検討は微に入り細に入っている」。作品研究も進み、文学精神を追跡する文学精神史の研究も、秋山虔氏の平安女流文学精神の形成を追尋する研究などに独自にして豊かなみのりが示されている。

そしてまた、精神を促える方法も、作品の内在する精神・理念の、歴史と環境、歴史的社会的基盤との有機的連関が緻密・周到に探求され、そこに考証の役割も有機的なものとして有力に介在せしめられるようになり、徹底した作品研究を促すことにもなっているのである。

しかし、本書の価値の独自性は今なお新しいこと前述のとおりである。

さて本書の内容は、序説　魂の漂泊、第一章　浪漫的思想、第二章　みやびの表象、第三章　礼讃と幽艶、第四章　自適と逸狂、結言　道の発見というように構成せられている。中古中世の精神的徴表が取りあげられ、各章さらに項目を設けて、中古中世の文学精神の特質があまねく促えられている。

序説　魂の漂泊は、時代の精神が、文化史的観点から宗教、文化政治にわたって促えられている。これによって、「純なる直観のみの世界」＝「古代」をはるかに望郷のかなたにのぞまねばならなくなった「分裂」の時代としての暗さのよってきたる経緯を大観しうるのである。「古代へ与えられた弔鐘の響」は実に女流の手によってうちならされた。生命の理想としての「あてにしてみやびなもの」の最上」を極めようという女流の浪漫的、感情的要求によって開かれた『中世文学』はそこに主要な理想を見ていたと述べられ、「そしてわれわれは、そのあてなるものの一歩さきに、永遠の女性なるものを夢想するのである」と言われるとき、表題のフェミニズム、夢幻的傾向、「はかなし」と「あはれ」、「あやし」より「あぢきなし」によっても分るように、平安女流の精神の徴表が的確に促えられた洞察の深さと、わたくしたち平安文学研究者の精神的風土を指摘された思いとに、改めて敬服するのである。

本書の価値は、かようにこの時代の文学精神の真髄が深い洞察によってあまねく促えられていることにある。そして「あまねく」促えられているのは、垣内先生の「よく読め」と言われたことの真摯な実践による。本書に引かれている文献の博大なることを銘記し、学問の博大、広遠を学ぶべきである。

先生の文章は生命の流動するごとく全くリズミカル、山をめぐり谷をわたり、泉にいこい、太陽の光明を仰ぐ昂揚と星月夜にたたずむ静かな心のしらべを聞く思いがするのである。一言にして申せば浪漫的な文体と評することがゆるされよう。

「愛情の、はかなき世に、はかなくて、また、時間が流れてゆくのである。」とか、「かくて自然を流転の相において観ずるとき、万物凋落の季節であり、寂滅を予兆する時季である秋が、最も物のあわれを知らしめる時期と思われるのは必然である。」など、任意の一節を引いても、その生命感の躍動するリズミカルな文体が味わわれるのである。けだし先生の生命の輝きのおのずからなる流露であろう。

本書の内容は文学精神史、文芸思潮史であるから、別に作品解説を欲する学生は、そのような文学史の著述を併説することが望ましい。本書のユニークな価値はそのような併説によっていっそう輝きをますであろう。

玉上琢彌博士の「源氏物語研究」は角川書店から刊行されている「源氏物語評釈」の別巻として出されたものである。既に発表され

た研究論文をほぼ発表順に排列して一冊とした論文集である。先生の物語音説論の学術的体系をなすと申してよいであろう。

「女のために女が書いた女の世界の物語」という源語観は先生の築きあげられた学説である。一番最後に置かれた「女のために女が書いた女の世界の物語」は、『国文学解釈と鑑賞』第二十六巻第六号昭和三十六年五月号に書かれたもので、先生の学説が平易にまとめられている。はじめての読者は、あるいはこの文章から読みはじめたらよいかもしれない。

源氏物語を「小説」としてでなく「物語」として読もうとされ、作品を裁断批評するのでなく、作品の語り出すものに耳をすまし、作品の内側にはいろうとされたことがしるされている。「批評とは無私への道である」と言った小林秀雄の言葉が思い合わされるのであるが、己を作品にぶつけて作品の本文をきめこまかく読むという学的態度なのである。

本書のはじめの方にある「昔物語の構成」は「国語国文」昭和十八年六・八・九月号に書かれたものである。物語文学のはじめ、昔物語は、短編が普通であった。十九世紀の短編小説が主題の下に求心的な構成をとるのに対し、物語は人生の断片を描く。主題に関係のないこともどんどん書く。だからその一部から話を発展させて別の主題の短編物語を書きついでいくことも可能であった。源氏物語の最初のあたりはこうした書きつぎによる構成をなしている。源氏物語の第一部は昔物語ふうの短編の集まりなのだ。それを光源氏の栄華という軸を通すことによって長編化が試みられている。短編から長編へという成長は、かような意味で源氏物語の内部において達成されたのである。要約して言えば、かような内容の物語文学観であるが、これは物語文学史に関する画期的な御説であったのである。

この学説に導かれて源氏物語はもちろん、源氏以外の「うつほ」や「浜松」など他の物語研究にも新しい歩みがもたらされたのであった。「うつほ」研究の目ざましい進歩に先生の学説が与えた影響は多大のものがあると考えられる。

何よりも、物語そのものをそのまま認めて、物語の語り出すものに耳をすまそうという基本的な学的態度、物語研究態度の与えた学恩は、はかりしれないものがある。現代人の自己の眼で作品を裁断しないという態度が、「うつほ」のような多くの「矛盾」をかかえた作品の解明に飛躍的な研究の発展をもたらす大きな原動力となったのである。

この「昔物語の構成」は、先生に私がお教えを乞う機縁を与えてくれた御論文で、学生時代、昭和二十五年が暮れて冬休が終わった二十六年の初頃、下宿の部屋でこの論文に魅了された感激を今も忘れない。

先生の御研究は源氏物語の本性の追究であり、就中、表現技法に関する独自な学説と思うのであるが、物語は絵をともなったとされ、源氏物語の本文は、絵をともなった言語芸術の表現として鑑賞してこそその本性にかなった読み方だとされた。「昔物語の構成」につとにその御見解は示されているが、「物語音読論序説」、「屏風絵と歌と物語と」に展開、充実したのであった。後者は、「美術研究」誌の秋山光和氏の論文や、家永三郎博士の「上代倭絵年表・研究」などに学ばれ、当時の絵との連関を説かれたのであった。かくて国文学者として全くユニークな存在として光っているのである。先生の物語音読論を構築する重要な研究であった。

「読者」という観点を作品研究の場に大きく導かれたことも先生の功績である。〝作品の意図〟、作品の語る順序にそって理解してゆく読者の読みの時点に〝文学〟は成立するというお考えは、作品研究の前進に大きな影響を与えているのである。「源氏物語の読者」「国文解釈の試み」「平安文学の読者層」などの論文に先生自身による具体的成果が示されている。このお考えは、つとに、「源語成立攷」のあと、多屋頼俊博士との論争というべき「成立攷論議」にも示されている。「夕顔」巻の「もののけ」に関する論のおさめられた「平安文学の読者層」では先生のお考え、読みとり方がはっきりうかがえる。この巻をはじめて読む読者としての享受、読みとり方が示されているのである。そこに妖物説の根源があることを知らねばならない。短編から長編へ書きつがれた長編化の物語文学観が最も根本にあることも知らねばならない。それを理解せずして反論を試みれば、すなわち長編としての源氏物語享受の立場から反論を試みるのは、この物語に対する作品読解の方法が出発点から食いちがっていることになるのである。基本的出発点が違っているのだから、客観的に見るとき、議論はまじわっているようで実はまじわっていない。源氏物語五十四帖を、まとまった一篇の長編として読む立場とは別に、その生成発展のすがたにおいて、当代の読者の読みに迫ろうとするのが先生の立場である。が、「国文解釈の試み」に「わたくし自身も『源氏物語』を完結した長編の作品と見よう、そういう風に論じたい、と思いながら、そこへゆくまでの一歩として巻々の短編性をまず説いているのである」と書かれていることも見のがせない。

「敬語の文学的考察」など、源氏物語の言葉を見つめる研究は、結局は源氏物語の本性を具体的に浮彫りする作業であるが、敬語の文学的な表現効果を論じたこの論文は、国語学の分野としても新風とユニークな業績として映るものであったろう。

「源氏物語准拠論——河海抄疏」は、河海抄をもって注釈書第一と考えられる先生の研究成果の一端であり、河海抄による源語観の深まりを促された論文であった。

以上は本書のすべてを紹介したわけではない。僅かに先生の源語観、学説のあらましを御紹介したにすぎない。読者みずから直接本

書にあたられることをおすすめする。

なお「源氏物語評釈」は、この、先生の学説の、具体的演習・ゼミナールというべきもので、各段落に「鑑賞」を施す。ここに併せておすすめしておく。本年は第六巻が六月に出版されている。

清水好子氏の「源氏物語論」は河海抄の準拠論を取りあげ、その源高明準拠説を中心に、延喜天暦という聖代に参画する一世源氏の、理想の人物の生涯というところに光源氏像のきざみあげを論証された。また、光源氏の須磨退居を周公東遷に比した書き方は、理想の人物、光源氏の像をきざみあげるのに中国古代の聖人を連想させるようにしているとされた。

過去の実在の人物、事件を思い浮かべさせることによって、虚構の物語と正史とが同じ次元に並び、正史ならざる史実だとして読者に享受させるのであり、光源氏像を通して、政治に対する作者の理想主義がうかがえる、とされるのである。

尤もかような準拠、作者の政治的傾斜は源氏物語第一部、少女巻あたりまでである。第一部の短編集合に長編としての軸を通した光源氏の栄華への道、政治的生涯のきざみあげの形成過程に示した作者の理想主義であった。女の物語としては異質とも言うべき性格であるが、これあるがゆえに第一部は面白いし、構成的にも複雑、複線的な厚みをもつ構造となっているのである。従来、本居宣長の「物のあはれ」論の影響のあまりにいちじるしい、情趣的世界としての説みとり方に偏していた傾向に対する克服を本書は促すものである。

本書は、清水氏の二回目の著書で、多くの読者は、氏の一回目の著書「源氏の女君」に親しんでいられることであろう。本学の学生も平安文学を卒論にえらぶ人たちには既に紹介し、ひっぱりだこで読まれている。今は入手しがたいので再刊が切望されている。本学の学生の卒論の平安文学関係の題目では源氏物語の女性論が多いから「源氏の女君」は教科書のようにあがめられ必読されている。私は、氏の今回の著書「源氏物語論」をもすすめることによって、源氏物語の世界の別の面をもぜひ知ってもらいたいと思っている。そして、恋と栄華とこの二つの世界のむすびつきをきわめてほしいと思う。

また本書の実証的な研究、詳密な論証に学ぶことによって、「源氏の女君」からうけた感激とは異なった感銘をうけることが、二書をあわせ読む者の大きな幸せとなるであろうことを申し添えておきたい。なお、本書の「書評」を既に「国文学攷　第40号」（広島大学国語国文学会）に書いたことをおことわりしておく。ここには要点のみを記したゆえんである。

今井源衛氏の「紫式部」は従来の紫式部論を超える氏独特の新しいきざみあげがなされており、種々教えられるところの多い快著で

ある。

氏の方法の特色は、いわゆる歴史的社会的観点を絶えず導入しつつ、式部の生涯をそれとの有機的な関連の下に浮き彫りされようとする点にある。確実な資料のとぼしい現在、この事は至難のわざであるが、本書は、この目的に向かってあたう限りの努力を傾けられ成果を示された。

資料がとぼしいから、ともすれば歴史的、社会的なものとの連関が巨視的な説明になりやすい。本書にもままそのようなところがないではないが、しかし、それは基本的な関係としてとどまる、とことわっていられる。小右記を中心に実資との関係をさぐられたあたりなどをはじめとして、新しい視角と密度の濃い浮彫りがなされているのである。かような実証的な論説によって緻密にきざみあげられた紫式部像は、氏の言われる「式部もやはり時代の波濤に揉まれ続けて一生を終った人である」というイメージを確かなものとしている。

本書は吉川弘文館の人物叢書の一冊であるから、あくまで紫式部の家系などをはじめとして伝記を意図して書かれている。だからいわゆる紫式部論といった文学論・作家論としてよりも、客観的な歴史的記述がなされている。そのことは、本書のはじめに氏自らことわっていられる。そのため、文学論的な式部論、つまり作家論としての式部論を期待する向きにはやや物足りない感じを与えるかもしれない。

しかし、「女性のしかも文学者の伝記」であるからというので、内面的把握の方法がとられており、紫式部日記を主たる資料として式部の人間像を浮彫りされているのである。読者として興味あるところであろう。

第九章の「『源氏物語』の展開と『紫式部日記』」は、著者のお考えが大胆に示されている。

モデル論による合理的結びつけがなされたり、いろいろ推定が下されているが、大まかな見通しにとどめられているので、詳細な御論考を早くおうかがいしたいものである。

伊周への関心と源氏物語の人物造型との関連など、この時代を生きた式部の像という観点にしぼられた説述から当然のモデル論ではあるが、モデル論は源氏物語の世界、人物造型の理解への示唆とはしても、あまりまっすぐな結びつけは警戒したい気がする。しかし、著者は作品と作者、あるいは虚構と事実は違うということを百も承知で、その結びつきにいどまれているのである。

作品の意図というものを重んじ、作品の世界と作者そのものとの結びつけに臆病な私としては、こういういとなみには、ある距離を感じるのではあるが、そのいどみに敬意を捧げたいと思う。

ただ作者論は、紫式部日記や紫式部家集その他実録によるのが確かで安心な気持がするのである。

著者は、源氏物語の作中人物の言動に、作者のそれと、そうでないのとを弁別する分析をかねてから試みていられる。その方法は、著者の式部観と作中人物の言動との間の距離の測定によってなされるようであるが、その洞察的見解に常々敬服しながらも、その方法にはある種の固定化がともないはしないかと思ったり私はしている。その洞察力の深さが研究者の力量なのではあるが、式部観というものが、紫式部日記の内容によるところが大きいことから考えておおよその式部観の固定があると思うからである。また作品の世界から作者論を行なうことは普通なされることだが、作品の意図から作者の意図を推考するのであれば、作品論も作者論も区別はなくなる。作品のみを前にして意図をさぐるとき、厳密には作品の意図としか言えないはずである。

また、著者も言われているように、「紫式部日記」と「源氏物語」との与える印象のズレをどう解決するか。著者が「この問題の解決は、いずれ『源氏物語』を正面から取り上げることによって果したい」と言われるのは実にこの大きな問題についてである。

筆のおもむくままに駄言を弄した。身辺、公私に忙しいことがあり、筆も的確な表現をとらない。的をはずれた妄評の弁解めいた言をつけ加えさせていただく。

源氏物語にひかれる読者は当然、その作者のことを知りたいであろう。そのとき、作者を「天才」だとかたずけないで、一個の人間としての、その生の具体相をきざみあげることに専念努力された本書は、深い共感と喜びをもたらすであろう。本書を心からおすすめするものである。

手塚昇氏の「源氏物語の再検討」を紹介させていただく。

「源氏物語の意図」の解明の大きな鍵として光源氏に対する予言を重大視されたこと、源氏物語の長編としての構想の軸として把握力説されたことは、後学に源氏物語の眼目を知らせようとする強い論調となっており、学ぶべき要点である。

桐壺巻の高麗の相人の予言については、「朝廷のかため」をただの大臣大将のことであって、「世の中保つ人」が摂政関白だとし、この予言は、天子になる人かと見ると難があるし、朝廷のかためのの大臣大将として見ると又それとも少し違う、そんなら何かと言うと摂政関白であって、その答は、桐壺帝の決定に示されている、と言っていられる。これには異見を抱くものであって、摂政関白でも大臣大将でも臣下に変りはないのであり、ここは、摂政関白と大臣大将との違いが問題とは思えない。臣下ならざる帝王の相として見るのと、臣下として朝廷の政治の補佐の相として見るのとの大別で

ある。私は、この「帝王の相」は、高麗の相人が准太上天皇ということがわからないまま、天皇か准天皇か准太上皇か不明の「帝王相」ということを言ったのだとの解釈をもつものであり、その点について「平安文学研究　第三十六輯」の拙稿「桐壺巻の高麗の相人の予言について」に述べたので御覧いただければ幸いである。尤も拙説にも大方の御批判があろう。

後記挿入説を批判していられるが、予言が長編としての構想の「始発」であるからといって、それだけで、それがそのまま、最初から書き出されたと決めてかかるわけにはいかない構造を第一部は有しているから、批判としては大まかといわなくてはなるまい。

後記挿入説に対する批判は既に多くの学者がしており、結論的には賛成する方々も多いであろう。ただ、この単純でない構造そのものに対して解析を施していく視角を失なってはならないのではないかと私などは思っている。後記挿入だとかたづけるのは、確たる実証があればともかく、文学論として細妙な展開を期しがたいと思うけれども。

さて、私は、この大著に文句をつけるために紹介の筆をとったのではない。本書の特色を述べて読者（これから読もうとする）に本書から学ぶべきことを私なりにあげてみたいと思ってである。

本書は、手塚氏の四十年前の著書「源氏物語の新研究」がモデル論をもって一世に影響を与えたのと同じく、やはりモデル論に特色があり、種々教わるところが多い。尤もモデル論と準拠論とはちがうし、源氏物語は、当代、一条朝にモデルを求めたものとする氏のお考えに対して、河海抄の説く準拠論を重んずる立場からは基本的に批判があるであろうけれども、過去の実在の人物と共に、道長など当代の人物の面影も認むべきである以上、氏の御論述から私たちがくみ上げるべきこと、教わることは多いと言わなくてはならない。

それから、この大著の魅力は、源氏物語の本性を各方面から説いてみせてある点であろう。ある学術的体系で貫くというよりは、源氏物語の作品としての諸特色諸問題を説くことによって全円的な大著となっている。最初に源氏物語の意図を論じ、紫式部に関する諸問題をも述べ、著作時期の問題を述べ、というふうに、特に目次に注意を喚起されてある論文は力をこめていられるようだ。氏の得意とされるところは、やはり歴史的事実との連関を説かれる論文で、教えられるところが多い。モデル論のことは前述したが、「紫式部の結婚の真相」とか、「冷泉帝の崩御と源氏物語」とかは氏ならではの感のする御論文である。

「源氏物語の技法と創作心理」は、「技法」について、諸角度から解説していられるもので、この技法大観によって、源氏物語の理解が広く深まることは疑いない。後学に対する親切な解説である。この客観的な説述、適切な解説は、氏が「後の研究者のお役に立て

ば」と思われて筆をとられた御意図がよく生きており、本学の学生にはまずここから読むようすすめている。

本書は普通の学術論文のように固苦しくないから読みやすい。理解しやすい文章である。一寸情熱的すぎるぐらい熱っぽい文章で、著者の声が迫ってくるような気さえする。

著者のお説には著者流の独自な強さがありすぎて、まま承知しがたい筆緻もあるが、しかしそういう個性的なところが本書の魅力であり、学ぶべきところの大なることに私たちは感謝したいと思う。

高橋和夫氏の「源氏物語の主題と構想」は、理論的な論の運びに特色がある。序説疑の「源氏物語の物語性」や「平安朝文学の社会的背景」は近代と平安朝時代の対比、相関性をさぐられた好論である。私は、特に後者について、今まで自分が感じ取っていた問題に明晰な解明を加えられたことを感謝している。

桐壺巻について、「原第一主題」十「第二・第三主題」を「原桐壺」と想定されるお考えは、私見によれば若紫起筆説と結びつけて考えるときいっそう説得力をもつと思う。「第二・第三主題」と若紫巻の藤壺密通事件との連接が強いからである。かかる観点から、*長恨歌的粉飾*は、「原桐壺」の後になされた「改筆」だとの想定は、豊かな示唆を与えるものと敬服する。

ただ私は、「改筆」とみるより構想意識上の二段階を想定してみる。「第一主題」は長編としての構想に必要となった「光源氏の生いたち」に更に長恨歌的な愛情物語が加わったものである。それは「桐壺巻」一巻を単に長編として「始発」に必要な巻とする構想上の必要物という機械的産物に終わらせず、一巻自体に女の物語としての愛情物語という抒情性を与え、物語文学としての長編の「序曲」を奏することとしたのだと思われる。だから「原桐壺」は実際に書かれてあったものと見るより、長編化の構想意識上の産物で、執筆時点では現在の桐壺冒頭からはじまっていたと考える方がよいのではないかと思うものである。

著者は「欠巻×」を想定するなど、現存作品に対する*合理的解析*を加える立場である。この立場に対する批判はすでに出ており、そのことについてはここでは多くを述べない。「六条わたりの御忍び歩き」とあって、後には六条御息所と分るが、玉上先生が言われるごとく（「夕顔の巻のもののけ」「源氏物語研究」三六四頁）、ここでは六条あたりの貴婦人とわかるだけの書き方なのであり、主題は夕顔物語なのだと考えれば、別に「六条御息所物語」を想定しなくてもよいではないかという点だけを述べさせていただこう。

「六条わたりの御忍び歩きの頃」を六条御息所とのこととここで決めてしまって、そこから過去を背負った書き方だという見解が出てきて、一方は六条御息所とのことを想像させる蹴化表現だとして×巻を想定する必要なしとし、一方は×巻ありという想定に立って考えてみるべしと分れるのだが、今ここに言うのは、そのいずれで

もない。

合理的解析はしなくてはならないと思う。情緒的態度で、現存作品を理解するのは研究とは言えまい。しかし、それはあくまで本文の言い表わす〝表現のかたち〟を凝視することに立脚しなくてはならないと考える。「六条わたりの御忍び歩き」という表現のかたちを凝視するとき、六条御息所とのことという注解的な内容の置きかえは軽々しく行なえないのである。

読みすすむにつれて分っていく書き方は源氏物語に多い。というより、その箇所に必要な書き方をするといった方がよいであろう。夕顔巻は夕顔が女主人公である。それに対比して高貴な女君の存在を分らせる書き方である。長編として通観すれば、この女君はむろん六条御息所のことであることは分る。「葵巻」でそれは分るのである。しかし、ここではそれを分らせる必要はなかったのである。

要するに「夕顔巻」は夕顔とのことを主題にして語っているのであり、上の品とのことは、光源氏の生活の当然の背景としてこの巻には描かれているにすぎない。構成的には桐壺巻と若紫巻を連接するものである。物語全体の主題・構想としては、上の品なる光源氏の当然の生活がつづいていることを示すもので、帚木の並びの物語に見られる生活は異質のものなること明らかである。帚木冒頭、夕顔結文のことごとしいことわり書きはそれを雄弁に語っているであろう。

源氏物語の本文・書き方に対する読みとり方の問題であるが、氏が合理を重んじられる態度、鋭い論理には深く敬服している。右に多少異見を述べたものは、書き方、表現のかたちをみつめた上での論理という点で、多少ひっかかるところがあったので忌憚なく述べさせていただいたのである。

事実を事実として鋭くえぐり出す合理的精神は著者の真骨頂で、「匂宮・紅梅・竹河」、「源氏物語年紀攷」などは著者の論理が鋭く説得力の強い論文で、教わるところが多い。

現行作品全体を、何が何でも紫式部一人の、現行の巻の順位通りの執筆として考える〝情緒主義〟は、確かに著者の御見解通り批判されなくてはならないと思うのであり、その学問的態度を本書からひしひしと教わるところ多大である。

「源氏物語の原始構想」は、著者の言われる「原始構想」があらかじめ世上にあったもので、作者の意図とは無関係なものとの〝仮説〟を立てていられる。が、そうすると、光源氏の政治性は、かかる意味での「原始構想」で、作者の意図でなかった、ということになるが、人間的なもの—愛情—を作者の意図と見るある種の固定観念、先入観がはたらいていられないだろうか。かような構想じたい—光源氏の政治性—がどうして作者の意図と考えてはいけないのだろうか。著者が藤壺すらを、「極言すれば、彼女は光源氏の〝手

段〟に過ぎない」と言われるほどの光源氏の造型の政治性は、単に骨組以上の〝描写〟がなされていると思う。それは「原始構想」の骨組の単なる〝粉飾〟ではないように思われる。この点が論の分れ目であろう。光源氏の造型が、〝伝説〟（貴種流離譚、栄達とその秘密）に負うところがあったと想定はされるにしても、源氏物語の構想としてその政治的性格は内実化していたのではあるまいか。

著者の〝腑分け〟は、それじたいの〝仮説〟そのものより、その〝腑分け〟によって明確化される作品世界の構造の解明に焦点を合わせて、私は、氏の立論を有難く読ませていただくものである。

「「二条院と六条院」―源氏物語における構想展開の過程について―」など創作意識の進展を追求した諸論文は、著者のユニークな着眼と発想であり、著者の研究的主張の見られるものである。

ついで「源泉編」「思想編」の諸論文がある。「源泉編」はモデル論、「思想編」は著者の言われる〝実存主義的傾向〟のものであり、魅力的な内容を充実させている。与えられた紙幅も尽きたので、読者が直接この論文を読まれることをおすすめすることにしたい。

本書は、今井源衛氏の「**源氏物語の研究**」、秋山虔氏の「**源氏物語の世界**」などについで、戦後の学究世代としての若々しいエネルギーと俊鋭の才質が横溢する快著である。心から学恩を感謝すると共に先学に対する若輩の妄評を諒恕ねがうものである。

岡一男博士の「**源氏物語の基礎的研究**」の増補版が出された。この名著もぜひ熟読をおすすめしたい。私は、この新版は本屋がまだとどけてくれないのでまだ入手していないが、近時の新説に対する批判が増補されてあるという。

読者は、本書の旧著について「国文学解釈と鑑賞」昭和40年7月号の「源氏物語研究図書館」の吉岡曠氏の解説を読まれたことであろう。今は、吉岡氏の解説を御覧いただくようと申し添えておくにとどめざるをえない。

なお、「源氏物語研究図書館」には既刊の源氏物語研究名著が解説されてあり、便利有益であることも申し添えておきたい。

以上、昭和41年度刊行（といっても、この拙稿執筆時―昭和41年9月―以前の大体上半期刊行の書ばかりであるが）の、源氏物語の研究書を主として平安文学研究の著書を書評・紹介させていただいた。本学国文学会会員の学生の読書欲の高まりの一助とならば幸いである。本稿は主として本学の学生を対象として紹介の筆をとったもので、そのため啓蒙的筆致に流れた傾きがあることを、著者の諸先生や大方の各位に御諒恕を賜わりたくおねがい申しあげる。

（昭和41年9月10日）

＜紹介著書一覧＞

斎藤　清衛　「中世日本文学」（有朋堂　昭和四十一年五月二十日刊A5判　三二二ページ　一、二〇〇円）

玉上　琢彌　「源氏物語研究」（角川書店　昭和四十一年三月三十日刊　A5判　四四六ページ　二、〇〇〇円）

玉上　琢彌　「『源氏物語評釈』第六巻」（角川書店　昭和四十一年六月三十日刊　A5判　四七六ページ　二、〇〇〇円）

清水　好子　「源氏物語論」（塙書房　昭和四十一年一月十五日刊　B6判　二七六ページ　五三〇円）

今井　源衛　「紫式部」（吉川弘文館　昭和四十一年三月三十日刊　新書判　三〇四ページ　三六〇円）

手塚　昇　「源氏物語の再検討」（風間書房　昭和四十一年一月三十一日刊　A5判　六四二ページ　四、二〇〇円）

髙橋　和夫　「源氏物語の主題と構想」（桜楓社　昭和四十一年二月十五日刊　A5判　四六六ページ　二、八〇〇円）

柿本　奨　「蜻蛉日記全注釈上」（角川書店　昭和四十一年八月二十日刊　A5判五三三ページ　二、五〇〇円）

石田　穣二　「枕草子下巻」（角川書店　昭和四十一年四月二十日刊　文庫本　四六八ページ　二二〇円。上巻は四十年八月二十日刊　四一〇ページ　一八〇円）

山脇　毅　「枕草子本文整理札記」（関西大学国文学研究室内山脇先生記念会　昭和四十一年七月一日刊　A5判　四二八ページ）

宇津保物語研究会編　「宇津保物語新攷」（古典文庫　昭和四十一年一月二十日刊　A5判　五九七ページ　二、八〇〇円）

角田　文衛　「紫式部とその時代」（角川書店　昭和四十一年五月三十一日刊　A5判　六六八ページ　三、五〇〇円）

武者小路辰子　「源氏物語の女性像」（角川書店　昭和四十一年四月三十日刊　B6判　二七八ページ　五八〇円）

吉田　幸一　「和泉式部全集　資料篇」（古典文庫　昭和四十一年六月十日刊　A5判　六四二ページ　四、五〇〇円）

藤岡　忠美　「平安和歌史論」（桜楓社　昭和四十一年二月五日刊　A5判　三七二ページ　二、四〇〇円）

橋本不美男　「院政期の歌壇史研究」（武蔵野書院　昭和四十一年二月十五日刊　A5判　三三八ページ　二、〇〇〇円）

岸上　慎二　「後撰和歌集の研究と資料」（新生社　昭和四十一年一月三十一日刊　A5判　五六一ページ　二、五〇〇円）

久曽神　昇　「西本願寺本三十六人集精成」（風間書房）

池田　亀鑑　「平安時代の文学と生活」（至文堂　昭和四十一年六月十日刊　A5判　六四六ページ　二、五〇〇円）

大阪女子大国文学研究室　「後撰和歌集総索引」（大阪女子大学　昭和四十年十二月二十日刊　非売品）

萩谷　朴　「平安朝歌合大成第九巻」（萩谷朴　昭和四十一年七月二十日刊　非売品　予約会費　三、〇〇〇円）

岡　一男　「源氏物語の基礎的研究」（東京堂　昭和四十一年八月刊　A5判　三、〇〇〇円）